

5 主な化学物質の用途と有害性

今回の報告で、排出量が多かった化学物質の用途や有害性は次のとおりです。

物質名	主な用途	人に対する有害性
トルエン	合成原料（合成繊維、染料、火薬（TNT）、香料、有機顔料、可塑剤、ガソリン成分、溶剤（塗料、インキ））	長期間にわたって体内に取り込んだ結果、運動障害や記憶障害などの神経系の障害のほか、腎臓、肝臓や血液への障害が認められます。 シックハウス症候群との関連も疑われています。
キシレン	合成原料（テレフタル酸、染料、有機顔料、香料、可塑剤、医薬品）、ガソリン・灯油成分、溶剤（塗料、農薬）	高濃度で、眼やのどなどに対する刺激性や、中枢神経へ影響を与えることが報告されています。 シックハウス症候群との関連も疑われています。
エチルベンゼン	合成原料（スチレン）、溶剤	シックハウス症候群との関係が疑われています。 動物実験で肝臓及び腎臓重量の増加、肝細胞などの腫れが報告されています。
塩化メチレン	洗浄剤（金属脱脂）、溶剤（重合用）、エアゾール噴射剤、インキ成分、ペイント剥離剤	高濃度で、吐き気、だるさ、めまい、しびれなどの神経系の症状が報告されています。 動物実験でがんの発生率の増加が認められ、人に対する発がん性が疑われています。
ノルマル-ヘキサン	溶剤（重合用、接着剤、塗料、インキ）	長期間取り込み続けた際の影響については、頭痛、四肢知覚異常、筋力低下などが報告されています。 動物実験で胎児への体重低下が認められています。
テトラクロロエチレン	溶剤（ドライクリーニング、医薬品、香料、塗料）、洗浄剤（原毛用）、合成原料（代替フロン）	高濃度で、肝臓や腎臓への障害が認められることがあると報告されています。低濃度で、頭痛、めまい、眠気などの神経系への影響が報告されています。 動物実験で肝細胞がんの発生が報告されています。

出典：「PRTRデータを読み解くための市民ガイドブック」
「化学物質ファクトシート 2012年度版」
環境省環境保健部環境安全課